

玉川学園 K-12

英語が私にくれたチャンス

玉川学園 IBクラス 9 年生 加藤 瑛美

玉川学園の国際学級（IB クラス）で学ぶ帰国生が、海外で得た「宝」を帰国後もどんどん伸ばしています。

私はニュージャージー州に 2 年半、カリフォルニア州に 4 年、合わせて 6 年半アメリカに住んでいました。私がアメリカに住むと決まった時はまだ幼稚園の頃で、最初は日本ではない違う国に住むということに対してとても抵抗がありました。実際にアメリカでの生活を始め、幼稚園に通うようになると、みんなが何を話しているのかもわからず、肌、目、髪の色が違う人たちがたくさんいて、なぜ自分はここにいてこんな生活を送らなくてはならないのだろうと幼いながらに不安を抱きました。そして毎日嫌だと言って泣きながら幼稚園に通いました。今でもそのときのことをよく覚えているほど本当に辛くて苦しかったです。そんなときに私を支えてくれたのが両親や日本人の友達でした。同じ状況にいる仲間がいたことで自分も頑張ろうと思えたり、私の気持ちを理解して励まし続けてくれた両親がいたからこそ、この大きな壁を乗り越えることができました。そして日本に帰国する時、友達とアメリカから離れるということがとても寂しくて悲しく思えたほどアメリカを好きになっていました。

この苦労を周りに支えられながら乗り越えたことで今の自分があると思います。

今は玉川学園の国際学級（IB クラス）に入って、数学、理科、社会、英語、情報、美術などの科目を英語で勉強しています。

そして将来は日本で国際交流の仕事をしたいと思っています。この国際学級に入ったことで英語の力を今でも伸ばしていけるし、英語ができるということによって、将来も見えてきています。

また、玉川学園は国際交流が盛んです。そのなかにラウンドスクエアという世界中の学校から生徒が集まって国際会議をする加盟校だけが参加できるプログラムがあります。日本では玉川学園が唯一の加盟校なので、私はこの絶好のチャンスに挑戦し、4 月から 5 月にかけてカナダで行われたジュニア会議、そして 10 月にインドで行われた国際会議に学校の代表として 6 人の中の 1 人に選ばれ、参加させていただきました。

カナダのジュニア会議は参加者がみんな中学生で、キャンプに行ってグループアクティビティをしたり、マクドナルドやデルコンピュータなどの会社から企業の社会的な責任、環境への取り組みについての講義を受けたり、各学校で準備した自分たちができるボランティアのプレゼンテーションをしたりしました。

インドの会議では参加者は高校生が多く、ジュニア会議よりもレベルが高いと感じました。各学校の生徒がひとりずつになるようにグループに分かれ、会議テーマの「無知の暗闇から知識の光へ」に沿ったディスカッションをしました。政治家などから講義を受けたり、奉仕活動として美術作品を作って売ったり、また会議と同時にインドの文化の踊りなども見ました。インドの方の会議はインパクトの強いものでした。ディスカッションをしても知識の差など感じ、私にとって少し辛い時間になりました。英語を話せるだけでなく、もっと色々なことを知って、自分の意見を相手にきちんと伝えることができなくては意味がないと気づかされました。また、インドの観光をしたときは、幼い子ども達がお金や食べ物などをせびってきたり、ごみがたくさんあちらこちらに落ちていたりなど、初めて見る光景にただ驚くだけでした。貧富の差を感じ、教育を受けられる私たちの普段の生活の豊かさに感謝しなくてはならないと思いました。そして日本に帰ってきてからまずは学校の生徒にこれらを伝え、自分たちができることをし、この問題を深く受け止める必要があると思いました。2 つの会議を通してたくさんの人と出会い、色々なことを感じ、自分に足りないところを見つけ、そして何よりも充実した時間を過ごすことができました。

英語を身につけることで、本当にたくさんの可能性に出会えます。私は英語が話せるようになって、たくさんの国の人と友達になり、更に色々な国に興味を持ち始めました。そして将来も英語を活用した国際交流系の仕事に就きたいと思ったのも、英語が話せるようになったおかげだと思います。英語は世界共通語です。身に着けるまでにはたくさんの時間と苦労が必要ですが、これらの先には必ず英語が話せるようになって良かったと思えることが待っています。私はこれからも努力し、生活の中で英語を有効活用して自分のためになる色々な体験をしていきたいです。



ジュニア会議の加藤瑛美さん（中央）